

第2回リデュース部会会議録

1. 日 時

平成17年10月7日 13時30分～14時50分

2. 場 所

塩谷広域行政事務組合 1階大会議室

3. 出席者

職 名	氏 名
部会長	(学識経験者) 西谷弘子
委員	(矢板市) 小松高行
	(さくら市) 菊池崇雄 蛭田幸子
	(塩谷町) 松尾享子
	(高根沢町) 君島 毅
	(地元住民代表) 高塩克敏
	(アドバイザー) 今泉繁良
事務局	(日本技術開発) 高橋富男 宮澤俊介

4. 議事項目

- ・リデュースについての考え方の整理
- ・取り組んでいる項目の中で浸透していない項目の整理
- ・新たに取り組める項目の検討
- ・その他

5. おもな意見

- ・リデュースは、住民や事業者が話し合い、共に活動していくことが必要である。
- ・マイバック運動は、消費者だけでは普及しない。企業と消費者が話し合いながら、進めていく必要がある。
- ・過剰包装を減らしていくためには、私達が従来から持っている意識を変えていく必要がある。
- ・「ごみ」という定義が曖昧である。自分には不必要なものであっても、他人には必要なものであったりするし、地域性などによっても大きく異なってくる。そこで現在、塩谷広域で燃やされているものの中で、何を減らしていくことができるのか、また、何を減らしていかななくてはならないのかを検討していくべきである。

6. 会議録

【部会長】

- ・リデュースとは心理的なものか大きいと考える。そのため、住民や事業者へどのように普及していくのが重要となってくる。現在、各市町において3Rの取り組みは浸透しているのか。

【委員】

浸透していないと思う。現在、保健委員として活動しており、多くの問題があることを知った。組合は、ニュースレターを作り配布しているが、専門用語が多くてわかりづらい。

【部会長】

塩谷広域以外では、どのようにして普及活動を行っているのか。他の市町村のキャッチフレーズを調査してほしい。

【委員】

- ・先日、冷蔵庫が壊れたため、修理を依頼したのだが、保証等の制度がいろいろあることが分かった。修理体制を整えていくこともリデュースとなる。

【委員】

- ・デポジット制が広がっていない理由のひとつとして、企業の利益にならないことがあげられる。

【部会長】

- ・商品以外のものを極力家庭に持ち込ませないようにするため、商店や家庭でできることを考えていくべきである。例えば、エコカードやエココインといった活動を行っている事例もある。

【委員】

喜連川地域では、マイバック運動を行っているが、現在スーパーに行ってもマイバックを持ってきている人は半分にも満たない状況である。

【委員】

地域の業者が中心となって普及活動を行っていく必要があるのではないか。

【委員】

県や商工会で普及活動を行っているが、なかなか広がらないのが現状である。

【委員】

- ・スーパーの買い物かごをそのまま持ち帰れるシステムができれば、非常に便利であり、買い物袋を使用することもなくなるのではないか。しかし、会計などの問題もあり、システムの確立は難しいだろう。

【事務局（日技）】

- ・ごみを減らそうと各種活動に参加する人は良いのだが、参加しない人たちをどのようにして動かしていくのかを考える必要がある。

【委員】

青年会議所で分別ゲームを行ったことがある。参加者は、1回目は間違えるが、2回目以降から正しく分別ができるようになった。

【委員】

・マイバック運動などは、消費者だけでは普及しない。企業と消費者が話し合っていないと、前に進んでいかないだろう。

【委員】

・メーカーの保証などを考えると仕方のない部分もあるが、製造業でも過剰な包装が目立つ。

【アドバイザー】

人にあげるものなどは、綺麗に包装していなくては恥ずかしいとか、みっともないといった、私達が持っている従来からの意識を変えていく必要があるのではないかと。

【部会長】

最近のコンビニエンスストアでは、袋や箸など必要かどうか聞いてくるため、必要のないものを断りやすい。

【委員】

家に入らないようにするためには、店から出ないようにしなければならない。

【アドバイザー】

・そもそも、「ごみ」という定義が曖昧である。自分には不必要なものであっても、他人には必要なものであったりするし、地域性などによっても大きく異なってくる。そこで現在、塩谷広域で燃やされているものの中で、何を減らしていくことができるのか、また、何を減らしていかなくてはならないのかを検討していくべきである。

【委員】

リデュース部会で減らしていけるものを見つけていくべきである。

リデュース部会終了